

【自分が蒔いたものを刈り取る】

ガラテヤ6章1～10節
15. 07. 12.

▼5年前にこの箇所を読んでいました。その時、厳密には6章1～6節でした。今回は、1～10節になります。そこで、先ず前回箇所と共通する1～6節を読み、それから、7～10節を読みたいと思います。

前半部分でお話ししたいことは、ほぼ前回と重なります。むしろ、前回の要約と言いますか、直截主題に結びつくことに絞って振り返りたいと考えます。

2節と5節、その一部だけを読んでみます。

『互いに重荷を担いなさい』

『めいめいが、自分の重荷を担うべきです』

この二つを、前後の文章から切り取って、並べて見ますと、真逆のことを言っているようにしか聞こえません。

▼参考のために、より直訳的な翻訳を見ますと、2節は、『互いに重荷を負い合え』であり、新共同訳聖書と殆ど変わりません。そして、5節は、『各人は、自分自身の重荷を負うべきであるから』これもほぼ同じです。そして、よりはっきりとします。

▼互いに矛盾しているようにしか聞こえませんが、しかし、両方ともが真実であり、実は矛盾しているどころか、同じことを言っています。

つまり、『自分自身の重荷を負う』ことの出来る者が、初めて、他の人の重荷を負うことが出来るということです。

そして、他の人の重荷を負うことが出来る者、他の人の重荷に気付く者が、『自分自身の重荷を負う』ことが出来ます。

▼勿論、『自分自身の重荷を負う』ことが、なかなか出来ない状態にある者は、他の人間にかまうとか、その逆とか、排除のために言われていることではありません。『自分自身の重荷を負う』とは、必ずしも、経済的に自立しているとか、信仰的に自立しているというような意味ではないと考えます。少なくとも、そういう所に主眼はありません。

▼これを祈るという事柄に置き換えてみたらどうでしょうか。前回の要約からははみ出しますが、短く申します。

真に自分の祈りを持っている人は、他の人のためにも祈ります。他の人のために祈る者こそが、自分自身のことも祈り、そして神に委ねます。

もっと簡単に、一人で密室の祈りをする者は、礼拝や祈祷会の場で祈ることが出来ます。一人で密室の祈りをする事のない者は、礼拝や祈祷会の場で祈ることは出来ません。

これは全然矛盾ではありません。

『互いに重荷を担いなさい』

『めいめいが、自分の重荷を担うべきです』

これは、そういった意味合いで語られた言葉だと思えます。

▼少し角度を変えて読みたいと思います。前回の引用と同じです。省略しようかとも思いましたが、これほど説得力ある例は他になく、もったいないので、またお話しします。

児童文学者のエリック・C・ホガードに、『奴隷少女ヘルガ』という本があります。その扉に記された献呈の辞に、このように記されていました。

「愛する息子マルクへ、君が大人になった時に、他人を愛するように、自分自身を愛することができるように。」

これは、勿論、『隣人を自分のように愛しなさい』というイエスさまの言葉をもじったものです。

▼『隣人を自分のように愛しなさい』よりも、ホガードの「他人を愛するように、自分自身を愛することができるように」の方が、むしろ、リアルかも知れません。

例えば、恋愛のことを振り返ってみれば、そこには「他人のことを愛しても、自分自身を愛することが出来ない」現実があります。その逆「自分自身を愛しても、他人のことを愛することが出来ない」人もあります。

▼しかし、「自分自身を愛することが出来ない」ような者の愛に、異性が応えることが出来るでしょうか。ちょっと難しいでしょう。

一方、「自分自身を愛していて、他人を愛することが出来ない」ような人間は、これは、魅力がないどころか、鼻持ちなりません。そんなナルシストか自惚れ屋は、絶対に嫌われます。

▼『隣人を愛』することの出来る者が、正しい意味で自分を愛することが出来るのだし、自分を愛することが出来る者が、『隣人を愛』することが出来るのだと思います。

▼やはり、『自分自身の重荷を負う』ことの出来る者が、始めて、他の人の重荷を負うことが出来るのであり、そして、他の人の重荷を負うことが出来る者、他の人が背負っている重荷に気付く者が、『自分自身の重荷を負う』ことが出来るのです。

▼もう一度、2節を読みます。

『互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです』

これを文字通りに受け止めるならば、『キリストの律法を全うする』ことは、つまり、信仰の道を究めることは、『互いに重荷を担う』ことによって、実現されることになります。

『互いに重荷を担う』、このことと、先程の『隣人を自分のように愛しなさい』、つまり、イエスさまの教えの究極とは、同じことです。

『隣人を自分のように愛』することと、『互いに重荷を担う』、このこととは、全く同じことです。

▼ここから、後半部、今回の固有の箇所を読みます。実は、5年前には、6節には全く触れませんでしたので、6節から読みます。

『御言葉を教えてもらう人は、教えてくれる人と持ち物をすべて分かち合いなさい。』

この言葉は、7節以下と読み合わせて、このような意味を持っていると解釈されています。定説と言って良いでしょう。

つまり、当時の伝道者を、教会員が養う、伝道資金を出すという意味だそうです。

初代教会は、使徒言行録にもありますように、財産を持ち寄って生活していました。その状況での話です。

これが現代に通用するか、しないか、また、現代の牧師謝儀については、いろいろな考え方があり、この箇所だけで結論づけることは無理ですので、私もしません。

諸教派の考え方に違いがありますので、正解はありません。ただ、それぞれの教団、教会に、考え得方も規定もありますから、それに従うべきだとは思いますが。それが不満な人は、牧師で

も、信徒でも、他の教派なり教会に移るしか解決方法はありませんでしょう。

2回続けてパスするのも何だか不自然ですので、最低のことを申しました。これ以上はよろしいでしょう。

▼7節。

『思い違いをしてはいけません。神は、人から侮られることはありません。人は、自分の蒔いたものを、また刈り取ることになるのです。』

6節で言いましたように、これは、献金のことかも知れません。しかし、それに限定して読む必要はないと思います。もっと拡がりを持って解釈されてもよろしいでしょう。

『人は、自分の蒔いたものを、また刈り取る』その通りでしょう。

自己責任という言葉がはやったことがありました。これを嫌う人もあります。まあ、分かります。しかし、昔は、自己責任などという柔らかい表現ではありませんでした。

自業自得です。ここまで言うと、きついし、裁きの言葉に聞こえます。

もっと単純に「蒔いた種」これだけで分かります。

▼『人は、自分の蒔いたものを、また刈り取る』とは、『自分自身の重荷を負う』ことにつながるようにも思います。自己責任の対義語は何でしょうか。責任転嫁、責任逃れ、自己弁明、そんなところでしょうか。

自業自得の対義語は何でしょうか。どうもぴったり当て嵌まるものが思いつきません。棚からぼた餅では、ちょっとずれてしまいます。

▼天に唾するという言葉が昔はありました。今は殆ど死語でしょうか。昔から、意味を間違っ
て使っていた人が多いそうです。間違いとは、天に向かって唾を飛ばせば、自分に落ちてくる。
これが間違いですが、意味する所は間違っていないかも知れません。天に唾するとは、権威あ
る者に逆らうことです。何より、神を神と思わないことです。

『人は、自分の蒔いたものを、また刈り取る』にも、共通すると考えます。

▼8節。

『自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、霊に蒔く者は、霊から
永遠の命を刈り取ります。』

『自分の肉に蒔く者は』、平たい言い方をすれば、欲望に走る者はでしょうか。欲望に走る者は、快楽を得るではありません。『肉から滅びを刈り取』るのが、所詮だと、こういうことになります。

肉体の快楽を求める者は、所詮、肉体の快楽しか得られない。本当の愛情は得られないということでしょうか。

▼9節。

『たゆまず善を行いましょう』

『善を行』うこと自体は、決して難しいことではありません。どんな悪人でも、本の気まぐれから、人や生き物を助けることだってあります。芥川龍之介の「蜘蛛の糸」を思い浮かべます。

しかし、『たゆまず善を行いましょう』となると、全然話が違います。これは至難の業となります。

同じ図式で、誰か人を愛することは、難しいことではありません。むしろ、当たり前、誰かを愛しています。しかし、誰をもとりますと、全然話が違います。至難の業となります。

▼イエスさまは、『汝の隣人を愛しなさい』と教えられました。隣人が良い人ならば、簡単な教えになります。しかし、そうでなければ、困難な教えになります。

ですから私たちは、隣人を選びたくなります。自分の好みにあった隣人を捜して、隣に近づいて、『汝の隣人を愛しなさい』と言う教えを守ったと考えたならば、それはごまかしに過ぎません。

▼『飽きずに励んでいれば』

これは、『たゆまず善を行いましょう』と重なります。

逆に『飽き』るとは何でしょうか。要するに自分の都合、自分の好みということになります。気分が向けば、人に親切にするけれども長続きしなくて投げ出し、結局人に押し付ける、そんな例は珍しくないと思います。

▼『時が来て、実を刈り取ることになります。』

元々が種の譬えですから、その譬えのままお話しします。

私は、月報にもしばしば書きますように、家庭菜園が趣味です。しかし、時間に余裕がありませんから、この頃は、手のかからないものばかりを選んで、植えています。

それでも全く手間要らずとは行きません。草取りくらいはしなくてはなりません。それさえ出来ませんから、出来映えは酷いものです。勿論、収穫は少なく、肥料代にさえ見合わないでしょう。

みすみす収穫出来ないで放ってしまい、鳥に食べられることもあります。

▼10節。

『ですから、今、時のある間に』

時間がなくなるということ、前提にしています。

使徒パウロ時代の教会は、いろんな意味でそうでした。何より、迫害、殉教が迫っていました。

しかし、現代でも、『今、時のある間に』は、全く当て嵌まります。

マタイ福音書6章34節。

『明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。

その日の苦勞は、その日だけで十分である。』

これも、明日は明日の風が吹くという意味ではありません。むしろ、今日できること、今日なすべきことをしなさいという意味です。

明日のことを考えたら、明日の準備をしたら、今日のことが出来なくなるであってはなりません。

▼『すべての人に対して、特に信仰によって家族になった人々に対して』

これも、『汝の隣人を愛しなさい』に通じますでしょう。

▼『善を行いましょう。』

ここでも、種を蒔く譬えの延長で考えるべきだろうと思います。

『善を行いましょう。』とは、種を蒔きましょう。福音の種を蒔きましょうです。そして、その種に水をやり、時には雑草を取り、それが、『善を行いましょう。』の意味だと考えます。